



カレント

Current

R16



協定書締結式の様子 ©WWF ジャパン

高緯度サンゴ群集域の生態系に適応する

目崎 拓真

vol.1 研究所の目指す未来

柏島で超高級魚 GET !

平坂 寛

深海に佇む豎琴

戸篠 祥

大月町の大きな水甕

伊勢 優史

オニヒトデ大発生 of 収束まであと一歩

喜多村 鷹也

公益財団法人 黒潮生物研究所

私は高緯度にあるサンゴ群集生態系が、今よりもっと人との関わり合いが深くなって欲しい、適応につながって欲しいと願っています。高知県の海を長年モニタリングするなかで、自然に見られる沿岸生態系の素晴らしさに胸を撃たれ、その想いはますます大きくなっています。

本研究所は、2022年2月に高知県内のサンゴ群集などの生態系に関連したネットワーク(こうちサンゴ沿岸生態系適応ネットワーク)の設立に関わり、2023年1月に、WWF ジャパンと四国太平洋沿岸の保全と持続可能な利活用に向けて協働していくことに合意し、協定を結びました(表紙写真)。四国の保全活動等を進めていく上で、他団体との初の協定となります。WWFは日本のみならず世界的な環境保護団体です。国内では有数のサンゴ礁生態系のある沖縄県石垣島白保での保全活動など、サンゴ礁域の保全に長年取り組まれています。WWF ジャパンとの協働協定をサンゴ礁保全の先駆的なノウハウを学ぶ良い機会と捉えています。今後はさらに四国全域に活動範囲を広げ、より一歩踏み込んでこの生態系と向き合いたいと考えています。

本連載では主に、高緯度サンゴ群集生態系に関する活動について紹介していきたいと思います。今回は、①高緯度サンゴ群集域とは何か、②研究所ができるまでの高緯度サンゴ群集と社会との関わり合い、それらについて紹介したいと思います。

四国の太平洋沿岸は、高緯度サンゴ群集域の中でも南に位置しており、気候変動による生態系

の変化を知る上で重要な海域です(図1)。「高緯度サンゴ群集」とは、分け方によって境界付近の海域に違いはあるものの、およそサンゴ礁地形(図2)が発達しない非サンゴ礁域にあるサンゴ群集(図3)のことを示しています。高知県を例にみると、在来のサンゴ群集に加え、近年の気候変動によって温帯性の藻場が衰退し、サンゴの分布域が拡大しています。さらに、南方系のサンゴが加わるなど生態系の変化は大きく、オニヒトデによる食害や高水温や低水温によるサンゴの死滅などの発生頻度は増加しています。

高緯度サンゴ群集域では、北に行くほどサンゴの生息種数は少なくなり、サンゴと社会や文化との関わり合いも薄くなります。サンゴへの関心が薄いだけでなく、漁の網に引っかかって破れるからとサンゴが邪魔者扱いされ排除されることがありました。

「場所によって生き物の扱われ方がこうも変わるのか……」と初めて高知県の海を訪れた際には強く衝撃を受けました。沖縄県のサンゴ礁の海で育った青二才の私は、身勝手にもサンゴはどこでも沿岸の身近な生き物として大事にされているものと勘違いをしていたのです。そして、この状況を改善すべく高緯度のサンゴをなんとかしたい!という想いが今の私の活動の原点です。

高緯度サンゴ群集は戦後しばらく、ほとんど目立った記録はありません。1970年代に入り日本各地で国立公園が誕生するなかで、事前の資質調査として盛んに各地の海域が調査されました。



その中で海中景観に優れた場所や利用に適した場所が海の国立公園である海中公園(現、海域公園)に指定されました。そして海中展望塔(図4)やグラスボートなど海に潜れない人でも観光ができる時代になり、高緯度サンゴ群集に観光ブームが到来しました。当時の新聞記事によると高知県土佐清水市奄串にある海中展望塔はオープン2日間で1万人、年間30万人以上の来場者があったそうです。

図1. サンゴ礁域と非サンゴ礁域の境界.



図2. 島の周囲を囲むように発達するサンゴ礁地形.

おそらく日本復帰後の沖縄県にはなかなか行けない時代に、四国、九州、紀伊半島などで、サンゴや熱帯魚など南国の生き物が見られるという物珍しさによるブームだったのではないのでしょうか。このような高緯度サンゴ群集の観光文化は芽生えにつながったと思います。その後時代とともに観光が多様化する中で、当初の賑わいだった海の観光は減少に転じていきました。そして、この一連の文化は限定的で、サンゴ生態系と社会とのつながりが深くなるほどの波及効果は得られませんでした。

また、観光ブームが始まった頃海中では、沖縄県でのオニヒトデ禍が、高緯度サンゴ群集にまで広がっていきました。高知県西南部もオニヒトデの増加により駆除活動がはじまり、高緯度サンゴ群集の保全活動が始まりました。オニヒトデ禍が終息すると、サンゴ食巻貝の大発生があり、高知県西南部や愛媛県南部では駆除体制が構築されていきました。この当時は和歌山県串本にある海中公園センターが中心となって、高緯度サンゴ群集域の生物相調査や保全活動が広範囲で展開され、サンゴの分布状況や駆除状況に関する記録が残されました。そして、高緯度サンゴ群集の研究や保全活動の礎となりました。

さらにこの頃、稀少なサンゴ群集域を開発事業から守る運動が展開され、高知県でも現在の



図4. 水深7mの海中の様子が覗ける海中展望塔.



図3. 高緯度のサンゴ群集（サンゴ礁地形はない）.

香南市大手の浜のマリーナ建設によるサンゴ群集の破壊が問題となりました。これらの環境破壊と保護運動は、サンゴの社会的な注目度を上げるきっかけになりました。

そして1998年に世界規模の高水温による白化現象によるサンゴの死滅がサンゴ礁海域を中心に社会問題化され、温暖化とサンゴなど沿岸生態系の問題が顕在化していきました。高知県ではこの時、白化はほとんどみられず、温暖化で温帯性藻場の衰退が報告されました。さらに、場所によってはサンゴ群集の分布域の拡大が見られるなど、生態系の劇的な変化が研究者の間で注目されるようになってきました。そして2001年に本研究所が大月町に設立され、四国太平洋沿岸のサンゴ群集の研究や保全を担うようになりました。

ここまでの歴史を紹介すると、高緯度サンゴ群集生態系も社会との関わり合いがあるのではないかとされるかもしれません。しかし、高知県内でサンゴの話をする、と、大多数の人は関心がなく、良くて宝石珊瑚と間違われ話がかみ合わないか、昔は海藻が多くて魚介類がたくさん採れたけど少なくなったと思ひ出話をされるかです。そもそもサンゴに限らず沿岸生態系と人の関わり合いが薄くなっていることが根本的な問題としてあります。設立22年を迎えた黒潮生物研究所は、これまで問題解決のため様々な活動をしてきました。しかし、高緯度サンゴ群集については、いまようやくスタートラインに立てた気持ちです。これまでの取組みの中で良かった点、悪かった点を振り返りながら、他団体とも協力して、変わりゆく高緯度サンゴ群集など沿岸生態系に社会がどのように適応していくかについて取組みを継続していきたいと思ひます。今後も応援どうぞよろしくお願いいたします！



九州でアラといえばクエ!

九州出身の僕にとって、高級魚といえば「アラ」一択です。ただし、ややこしいことに「アラ」と呼ばれる魚には地域によって複数の魚種が含まれており、さらにそのいずれもが最上級の価格と味を誇るのです。

まず、なんといってもいちばん有名なのは西日本、特に九州における「アラ」ことクエでしょう。日本最大級のハタであり、こってりと脂の乗った、それでいて上品な白身は値段のみならず味わいの面でも他魚の追随を許しません。

一方、関東や北陸で「アラ」といえばハタ科のクエではなく、アラ科のアラという魚を指すことが多くなります。クエに比べると知名度の点で半歩ほど譲るものの、こちらは標準和名（図鑑など学術的要素の強い場における呼称）が「アラ」。そういった面でいえば正真正銘なるアラの座はこちらのものかもしれません。また、うま味にたいへん富み「最上級の白身魚」と称える者もあるほど。価格もクエに劣らず高く、漁獲されればそのほとんどが料亭へ直行するため鮮魚店やスーパーで大衆の目に入ることはほとんどありません。

それから響きはやや異なるものの、沖縄ではチャイロマルハタなどの大型ハタ類を「アーラ」

と呼びます。九州でクエをアラと呼ぶ風習が伝わったのか、はたまた逆の経緯なのか。いずれにせよこれらアーラたちもやはりたいへん美味でいい値のつく魚であり、そうそう口にする機会にはありつけません。

さて、これらの「アラ」三者に共通するのは、いずれも体長1mを超す大型肉食魚であり、大きな口と丸々と太い胴体をもつこと、そして極上の美味にこそあります。ところが、近年になってそれらのアラ軍団に肉薄する「新たなるアラ」がにわかになら注目を集めています。

その名は...「スジアラ」!



沖縄では大型のハタ類を「アーラ」「アーラミーハイ」と呼ぶ

スジアラはクエと同じハタ科に属す大型魚で、やはり体長は最大で1 mを超えます。幼魚時代は体側に縞模様が浮かぶことから「筋のあるアラ」なる名をあてがわれたわけですが、成魚になると縞らしい縞は消えて失くなります。むしろ特筆すべきはその美しい体色で、鮮やかな朱色で塗りつぶされた魚体に満遍なくフラッシュブルーの斑点が散りばめられます(中にはやや黒ずんだ体色のものもあります)。この見事なカラーリングは他の「アラ」たちにはない本種特有の魅力といえるでしょう。

原色×原色とはずいぶんトロピカルな配色ですが、それもそのはず。スジアラは基本的に黒潮の影響を受ける海域にのみ分布する南方系の魚なのです。沖縄では「アカジン」という名でも呼ばれますが、アカは赤色、ジンは銭を指します。つまり赤くて金になる魚、という意味合いの呼称です。

食味の良さはクエにも引けを取らず、何より赤く染まる魚体は琉球文化圏における祝いの席に必須の品となっています。そうした理由から沖縄ではシロクラベラやハマダイと並んでもっとも高額で取引される「沖縄三大高級魚」に数えられているのです。近年ではその食味と美しさが広く知られるようになり、ただでさえ高かった価格が全国的に高騰中。いずれクエをはじめとしたその他のアラたちを抜いてトップ人気を得るのではないかとされるほどの勢いです。

南西諸島以外では対馬や高知県南西部などでも水揚げが見られますが、群れる魚でないこと、網を曳けない岩礁域に生息するため漁法が一本釣りか潜水漁に限られることから漁獲量は多くありません。しかし、こうした大型の肉食魚は採捕の影響を受けやすく、すぐに数を減らしてしまう



沖縄にて、漁師が水揚げした獲物の中に混じるスジアラ。鮮やかな魚が多い亜熱帯の魚の中でも一際色鮮やかだ

ものですから、これくらい非効率な利用が資源保護の観点からすればちょうど良いのかもしれませんが。

そういえばつい先日、釣具メーカーさんとのお仕事でスジアラの好漁場として知られる高知県大月町の柏島へこの魚を釣りに出かけました。サクッと釣って、余った時間で研究所に顔を出そう...などと考えていたのですが、これが大いに苦戦。予備日も含めてすべての持ち時間を柏島で過ごすことに。

柏島は日本有数の漁場とはいえ、生態系のほぼ頂点に君臨する魚種であるスジアラはそもそもの個体数が少ない。加えて、本種は岩の隙間に隠れる習性があるため釣り場は険しい磯となります。荷物を運び、竿を構えているだけでさながら修験道の修行のような様相に。僕のようなへっぽこ釣り人にはなかなか厳しく、数少ないアタリをとり逃がしたり、気づけばウツボに餌をとられることが続きました。朦朧としながら、この釣りにかけた旅費や餌代、磯へ渡るために雇った渡船の料金などを暗算してみたところ、その額はたいてい的高级魚は余裕をもって買い付



八重山沖で釣れた小型のスジアラ。色彩変異に富み、深場の個体はこのようにピンク〜オレンジ色のものが多い



柏島の磯は荒ましいけど魚の宝庫なんです！



これが高知県産の「スジアラ」ぜよ！磯に棲む個体は赤みが強く特に美しい！

けられるほどのものと判明…。
「なるほど、スジアラは高級魚なわけだ。」
と妙に納得。
「こんなに金をかけてまで釣るべき魚なのだろうか？」
とも思いました。正直言って。

けれど、最後の最後でスジアラが釣れてくれたのです。凄まじい引きの強さに耐え、7kgもある赤い魚体を抱え上げた途端に、ネガティブな考えははじけて消えました。美しすぎる。市場に並ぶ締められた個体を食材として買うのとはわけが違う。こんなにも鮮やかな大魚に生きたまま触られるというだけで、小売価格を超えた大枚をはたく価値は十分にある、と。

当然、食味も素晴らしいものでした。刺身が定番ですが、鮮やかな色合いを活かすには皮を残して霜作りにしてやると目にもおいしい。身は年間を通じて適度に脂を蓄え、断面はうっすらと虹色に輝く。また熟成させるほどに旨味を増し、正しい処理を行えば日ごとに異なる表情を見せてくれます。

しかし！この魚の真価は蒸し物でこそ発揮されます。特に頭部の酒蒸しは至高であり、荒い岩

場での暮らしに適した分厚いゼラチン質の皮目がブリッと、トロッと舌の上で踊って溶ける。高価ではありますが、ここまで視覚と味覚の両方を満たしてくれる魚はそうそうないでしょう。

近年は温暖化による海水温上昇とともに少しずつ分布が北上しており、水揚げされる地域も広がってきていそうです。それに伴い味の良さも広まれば、「アラ」たちをしのぐ超メジャー魚種となる日も近いのかもしれませんが。



お刺身は皮の美しさを活かして！



コトクラゲ（室戸沖産）。左：黒潮生物研究所の飼育個体，右：アクアワールド茨城県大洗水族館の飼育個体。

2023 年も 2 か月が過ぎましたが、いかがお過ごしでしょうか。今年は兎年ということで飛躍の年にしたいですね！ということで今回、ご紹介するのはウサギの耳のような形をした生き物です。その名もコトクラゲ。外見も生き様も非常に風変わりで、見るものを惹き付ける不思議な魅力があります。

コトクラゲは深場の海底に生息する底生性の有櫛動物です。2 本の腕部がせり上がり、豎琴（ハーブ）のような形をしているため“琴水母”の名があります。1941 年に有櫛動物の大家である駒井卓博士により、相模湾で得られた標本を基に新種記載されました。コトクラゲの学名は *Lyrocteis imperatoris*（ライロクテイス・インペラトリス）で Lyro は豎琴、cteis は櫛を意味します。imperatoris は皇帝のことですが、これはコトクラゲの調査や発見に貢献された昭和天皇に敬意を表してのことです。

コトクラゲは相模湾で発見されて以降、伊豆大島近海、駿河湾、野間岬沖、沖縄本島近海で報告されてきました。近年では韓国、フィリピンでも報告例があります。これまで四国沿岸では

未報告でしたが、昨年末に高知県室戸沖で初めて発見されました。コトクラゲが見つかったのは水深 150 m の砂泥底で、岩上に付着しているところを水中ドローンで捕獲されました。捕獲したのは 2 個体で、うち 1 個体はアクアワールド茨城県大洗水族館へ、もう 1 個体は黒潮生物研究所へ送り届けられました。

研究所に届いた個体は、まさに豎琴のような形をしており、体は淡赤色でした。コトクラゲの体色は様々で橙色や黄色、褐色、白色、桃色などが知られています。中には白地に紅色の斑点があるものも。これらは全て種内における色彩変異とされています。

現在、研究所で飼育中のコトクラゲは特に体が崩れることもなく、良い状態で維持ができています。今後は解剖して詳細な観察をしたのちに標本にする予定です。しかしながら、あまりに状態が良いので標本にするのが惜しいくらいです。このまま飼育すれば、繁殖にも繋がるかもと欲が出てきますが、二兎を追う者は一兎をも得ず、ということわざもありますので、状態が良いうちに観察と標本作成を済ませようと思います。



図 1. ミズガメカイメンと筆者。

高知県には「四国の水がめ」とも呼ばれる早明浦ダムがあります。四国地方最大のダムで、四国全域の経済や市民生活に影響を及ぼす重要な施設です。研究所がある大月町の海の中にも大きな水甕があります。その姿は、水甕というよりは大きな土器のようにも見えますが、これは水甕でも土器でもない「ミズガメカイメン」という生物です。このミズガメカイメン、水を貯めておくことはできませんが、生態系において重要な役割を果たしていることがわかってきています。今回は、このミズガメカイメンについて紹介します。

ミズガメカイメン *Xestospongia testudinaria* (Lamarck, 1815) は海綿動物の一種で、インド洋から西太平洋のサンゴ礁域に広く分布しており、日本では和歌山県南部からのみ記録があります。大月町で見つかった個体は和歌山県以外からの日本初記録です。

海綿動物は、最も祖先的な多細胞動物と考えられていて、筋肉も神経も内臓も持っていません。小さな幼生の時は水の中を泳ぐことができますが、海底の岩などに着底してくっつくとい生そこから動くことができません。

内臓をもたず移動することが出来ないカイメンが、どうやって生活をしているかというと、体の表面から周りの海水を吸い込み、そこに含まれている細かな有機物を濾しとって食べています。ミズガメカイメンでは、吸い込んだ水を濾過した後、上側に開いた大きな穴から排出します。このため、カイメンは水を綺麗にするフィルターとして重要な生態学的役割を果たしていると考えられてきました。

また、近年の研究から、カイメンは単に水を吸って綺麗にしているだけではなく、他の小さな動物達に餌を供給しているということもわかってきました。カイメンは、海水中から細かな有機物を濾しとって食べつつ、自らの細胞をどんどん排出しており、それを周辺の小さな巻貝、エビ、カニ、クモヒトデ等が食べているのです。こういった他の動物達に食べ物を与える側としての役割は、栄養塩に乏しいサンゴ礁や深海において非常に重要だと考えられています。

1 kg のカイメンが一日に吸って出す海水の量は、24,000ℓ、つまり24トンとの報告もあり、その量が莫大なのは容易に想像がつくでしょう。最近の研究では、カイメンが1日あたりに濾過する水の量は種ごとに異なるということもわかっ



図 2. ミズガメカイメンの外形.

てきています。画像のミズガメカイメンが一日にどれくらいの量の海水を濾過しているか正確な値はわかりませんが、その大きさから予想すると数百トンもの海水を吸っては出していると考えられます。

黒潮生物研究所では、近隣に生息しているミズガメカイメンが海水を吸って出す姿を動画撮影し、公開しています。是非ともご覧ください。

外形がよく目立つミズガメカイメン、その体は骨片と呼ばれる小さな骨で構成されています。骨片はカイメンによって様々な形をしていますが、ミズガメカイメンでは長さ約 0.35 mm の棒状です。これが複数の束になった繊維が三次元のゆるい網目状構造を形成して全身を構成しています。

ミズガメカイメンは通常、上側に大きな穴が開いた甕のような形をしていて、これが和名の由来となっています。成長した個体は、基部の直径 2.5 m 以上、高さ 1 m 以上に達し、穴の部分に人が入れる程になります。英語では、その姿を樽に見立てて Giant Barrel Sponge (巨大な樽カイメン) や、巨大な樹になるセコシア杉の幹に見立てて Redwood of the reef (サンゴ礁



図 3. ミズガメカイメンの骨片.



図 4. 蛍光色素を溶かした海水を放出しているミズガメカイメンと筆者.

のセコシア杉) とも呼ばれています。

世界には、このような大型になるミズガメカイメンが他に 2 種、オーストラリア北部に分布する *Xestospongia bergquistia* Fromont, 1991 とカリブ海からブラジル北東岸に分布する *Xestospongia muta* (Schmidt, 1870) が知られています。ミズガメカイメン類の生態学的研究のほとんどは、カリブ海の *X. muta* にもとづいて行われてきました。*X. muta* が多く生息するフロリダからバハマにかけての海域では、一帯の水深約 2 m から 13 m の間の海水が、これらカイメンによって約 2 日から 18 日ごとに入れ替えられているという研究があり、周辺生態系に大きな影響を与えていることが示唆されています。

また、カリブ海にあるオランダ領のキュラソー島からは、推定 2,300 歳以上の *X. muta* が見つかっており、ミズガメカイメンが長生きで大きく成長するカイメンであることがわかりました。

日本では、こういった大型カイメン類の情報が圧倒的に不足しています。ミズガメカイメンは、黒潮生物研究所がある大月町沿岸ではまだ 3 個体しか見つかっていません。大月町周辺や四国沿岸、更には日本沿岸には、まだ人目についていない大きなミズガメカイメンが沢山生息しているはずですが、私は、こういった日本全国のミズガメカイメンを発見し、定期的に観察・記録をして、このカイメンの謎を解き明かしたいと考えています。発見された方は是非、黒潮生物研究所へご一報下さい。

黒潮生物研究所 YouTube
チャンネル「The ♡ カイメン
The ♡ Sponge」



本誌にて、大発生することでサンゴを食い荒らすオニヒトデ（図1）について何度かご紹介させていただきました。また、愛媛県から高知県にかけての四国西南部に位置する足摺宇和海にてオニヒトデが大発生しており、サンゴ群集が大きな被害を受けていること、駆除活動が継続的に行われていることをあわせてご紹介させていただきました。この度、大発生が継続する足摺宇和海におけるオニヒトデの発生状況に変化がみられはじめましたので、これまでの発生状況の流れを含めご紹介させていただきます。

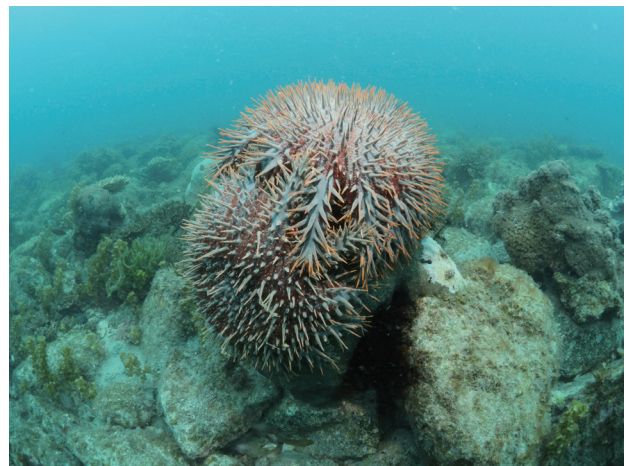


図1. サンゴに群がるオニヒトデ。

【減少傾向にあるオニヒトデの駆除個体数】

四国西南部に位置する愛媛県愛南町、高知県大月町、宿毛市、土佐清水市竜串にてこれまでに駆除されてきたオニヒトデの年間駆除個体数を図2に示しました。これら地域の海岸線は足摺宇和海国立公園に指定されており、古くからサンゴ保全活動が行われてきました。足摺宇和海にてはじめてオニヒトデの大発生が記録され、駆除が開始されたのが1972年で、約10年間、多くのオニヒトデが駆除されました。1980年代前半から2003年頃までオニヒトデの年間駆除個体数は少なく、サンゴの生育に問題な

い程度の生息密度であったと考えられます。しかし、2004年頃から、オニヒトデ駆除個体数が増加しました。この頃から第2回目のオニヒトデの大発生がはじまったと考えられます。2回目の大発生時のオニヒトデの年間駆除個体数は、2011年・2012年頃から減少傾向にありましたが、2016年頃から再び増加に転じました。2004年頃から継続するオニヒトデの大発生によって多くのサンゴ群集が荒廃し、終わりのみえない大発生に多くの人が頭を悩ませていました。状況が好転したのは2020年で、前年よりも年間の駆除個体数が大きく減少しました。

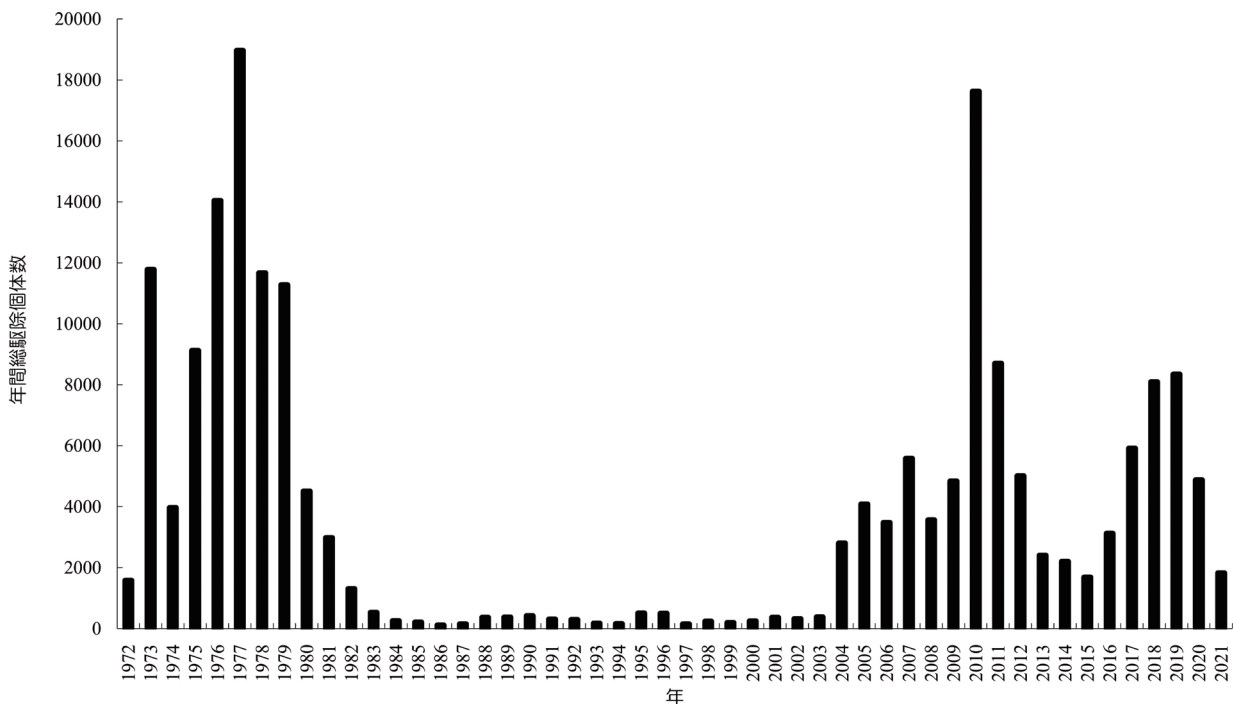


図2. 足摺宇和海における年間オニヒトデ駆除数の推移。

【各海域におけるオニヒトデ駆除個体数の傾向】

各海域における年間オニヒトデ駆除個体数についてもみていきます。愛媛県愛南町におけるオニヒトデの年間駆除個体数は、後述する2海域よりも少し遅れた2007年頃から増加しました(図3)。駆除個体数のピークは2019年頃にあり、その後は少しずつ減少傾向を示しています。2022年に関しては、現在も駆除が継続されており、正確なデータを提示することは出来ませんが、2021年の駆除個体数の半数以下になる見込みです。

宿毛湾・大月町沿岸における年間のオニヒトデ駆除個体数は、2004年・2005年頃から増加しました(図4)。2010年には1万個体を超えるオニヒトデが駆除されました。また、本海域でも2020年頃から年間のオニヒトデ駆除個体数は減少傾向を示しており、2022年も更に減少することが現状で見込まれています。

竜串における年間のオニヒトデ駆除個体数は、2004年頃から増加し、そのピークは2010年から2011年頃と2018年から2019年頃にあり、2020年以降は減少傾向を示しています(図5)。また、竜串でも同様に、2022年の駆除個体数は更なる減少が見込まれています。

この様に、足摺宇和海のそれぞれの海域においてオニヒトデの駆除個体数は減少の傾向にあり、2004年頃から約20年続いていたオニヒトデの大発生によりやがて終わりの兆しがみえてきました。

【大発生はもうすぐ終わる？】

それぞれの海域でオニヒトデの駆除個体数が減少傾向にあります。著者も駆除活動に同行することが多いのですが、オニヒトデの生息密度が数年前と比べて明らかに低くなっています。このままオニヒトデの大発生は収束するのでしょうか？

これまでの駆除活動では、どの場所に潜ってもたくさんのオニヒトデを駆除することができていました。最近ではオニヒトデの生息密度が下がり、ほとんどオニヒトデがみられなくなった場所もあります。一方で、オニヒトデの生息密度が以前よりも下がっているものの、何度入っても必ずそれなりの数のオニヒトデが駆除される場所が残念ながら各海域に複数箇所残っています。手放しに喜べる状況にはまだないのです。

【あと一步】

約20年間続くオニヒトデの大発生とその被害によって多くのサンゴ群集が被害を受け、瓦礫の山になった後、群集が回復しないエリアも多くあります。再びオニヒトデの生息数が右肩上がりになれば、その被害は更に拡大し、サンゴ群集が壊滅してしまう保全エリアもでてくるでしょう。ここでオニヒトデの大発生を収束される必要があります。

近年、各海域間での情報交換や次世代のオニヒトデの発生を抑制するための産卵期前の駆除活動の徹底など、大発生の収束に向けて保全体制が整いつつあります。大発生を今度こそ終わらせるため、著者も微力ではありますが、知恵を絞り、学術的な方面のみならず、駆除活動の最前線に立って戦いたいと思います。

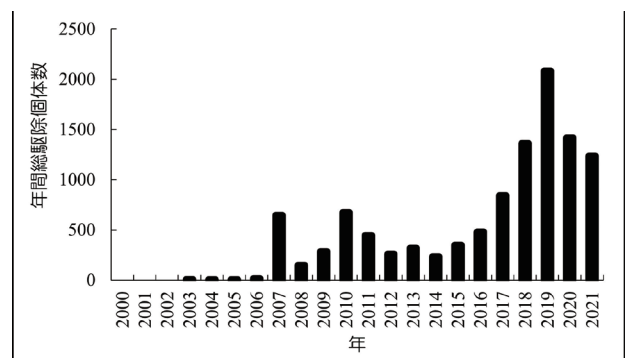


図3. 愛南町における年間オニヒトデ駆除個体数の推移.

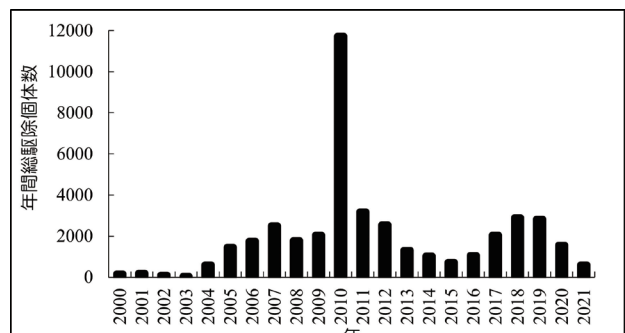


図4. 宿毛湾・大月町沿岸における年間オニヒトデ駆除個体数の推移.

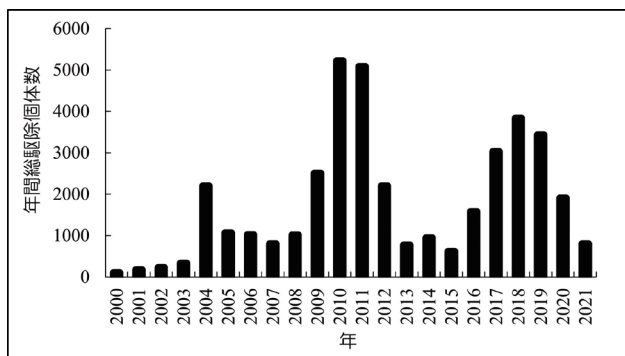


図5. 竜串における年間オニヒトデ駆除個体数の推移.

研究所からのお知らせ

新年がスタートしました

1月4日の仕事初めに研究員と研究員補揃って集合写真を撮りました。現在は研究員6名、研究員補1名で研究・業務を行っています。今年は兎年ということで、さらなる飛躍の年となるようにスタッフ一同頑張っていきたいと思えます。皆様本年もどうぞご指導・ご鞭撻のほど宜しくお願い致します。

第2回こうちサンゴ沿岸生態系ネットワーク集会の開催

1月31日に高知県土佐清水市にあるビジターセンターうみのわで、第2回こうちサンゴ沿岸生態系ネットワーク集会が開催されました。去年はコロナ禍でのオンライン開催でしたが、今年はハイブリッド方式での開催でした。

本ネットワークは県内外の市町村や水族館、研究機関と協力し、造礁サンゴを中心に沿岸生態系の保全や利活用に必要な人的交流・情報発信を進めています。集会では、WWF ジャパンの佐々木様の基調講演を活動・報告会が行われました。

午後は、集会参加者のみなさまと一緒に竜串グラスボートに乗り、竜串～見残し周辺のサンゴ群集を実際に見学していただきました。

目崎所長には竜串～見残し周辺のサンゴ群集の現状、生態などを解説していただきました。

グラスボートでは、夏季の高水温と冬季の低水温にさらされ、白化しながらも回復し、懸命に生きているサンゴ群集の美しさを観ることができました。

詳細は当研究所HP内にあります「事務局」をご参照ください。



新年最初の研究員の集合写真



ネットワーク集会の様子



竜串のサンゴ群集を見学する様子

Current (カレント) 季刊 2023年2月24日発行

編集・発行 公益財団法人 黒潮生物研究所

〒788-0333 高知県幡多郡大月町大字西泊 560 番イ

TEL 0880-62-7077; FAX: 0880-62-7078; URL: <http://www.kuroshio.or.jp>

E-mail: mail@kuroshio.or.jp (機関誌購読を希望される方はご連絡下さい)

3000円以上のご寄付でその年度のCurrent 4号分を送付いたします。寄附は当研究所のホームページまたは寄附申込書から受け付けております。

※本誌の一部または全部を複製する際には当研究所宛てに許諾を求めてください。